



TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No.23
December
2010





表紙 根岸英一氏 (2010年度ノーベル化学賞受賞者)

photo: Kyodo Photo Center

前グラビア 総会・講演会

photo: Hirokazu Takayama

同窓会メンバーから 小中陽太郎 吉田 哲 竹内 葵 石渡裕政 2

第2回三上フォーラム報告 5

2010年度総会報告 ①講演会 江端貴子 6

②総会報告 10

③決算・会務報告ほか 11

アンケート特集 フルブライト同窓会各地区の現状と活性化の方策を探る 12

ガリオア・フルブライト同窓会の活動 中部同窓会 16

2010年度財団奨学生冠名リスト/日米教育交流振興財団の状況 17

第35回日米交流チャリティー・ゴルフ大会 田中榮治 18

最高裁・国会見学ツアー ジュリア・ジョーンズ 19

日光・宇都宮ツアー 山田真之 20

鎌倉歴史散策ツアー 外池滋生 21

セミナー報告 藤原和博氏 我謝京子 梯久美子氏 22

同窓生の掲示板&短信特集 26

世界フルブライト・アソシエーション第33回年次総会 (ブエノスアイレス) 35

事務局から 佐藤ギン子会長退任 60周年記念行事に向けて 36

後グラビア ゴルフ大会 日本人フルブライター歓送会

表紙 = 根岸 英一氏

75歳。米パデュー大特別教授。満州から神奈川県大和市に育ち、東京大、帝人、そして1960年、フルブライト奨学生としてペンシルベニア大へ。Ph.D取得。有機合成化学クロスカップリング分野で、有機金属化合物、亜鉛を使用し、安定性、効率性を向上させて、C-C結合生成物を得る「根岸カップリング」を発見。今回の受賞につながった。米インディアナ州在住。

同窓会メンバーから

キング牧師とハロウィーン

小中 陽太郎

1983 West Virginia U.

作家・日本バンククラブ理事・星槎大学教授

1983年8月、Asian scholar in residenceという前から始まった制度で、ウエスト・バージニアのモーガンタウンに着いてすぐ、ワシントンDCで、公民権運動の集会在ひらかれる、と耳にした。大学から、夜行の貸し切りバスが出る、という。どういう集会かもわからぬまま、妻と二人の娘と乗り込んだ。バスは夜中にアラチア山脈を越えて、ゲティスバーグ、ポトマックをすぎ、早朝国防省広場に到着した。

モールにいくと、スピーカーから力強い声がひびいた。それでやっとわかった。キング牧師らによる公民権運動のピーク、ワシントン大行進から20周年の記念日だった。

1963年は、リンカーンの奴隷解放宣言から100年、キング牧師は、100年たってどこに自由があるか、と訴えたのだ。

81年、ビザの長い拒否の後、ニューヨークの反核デモに参加、リバーサイドパークで、「正義を洪水のように」という反戦牧師コフィン師の説教を聞き、キリスト教に接したばかりは、そのアモス書の聖句がキング牧師から来た事さえ知らなかった。

それから20年、「公民権法案はできたが、どこに自由があるか」とアフリカ系アメリカ人たちがふたたび立ち上がった。

私は雑踏の中で二人の娘の手を引いていた。

そして15年前にメンフィスで暗殺されたキング牧師の声が朗々と轟いた。

"I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character"



そのときである。文学に携わっていたくせに、「言葉が力となる。はじめに言葉があった」ということを実感したのは。

幼い二人の娘が、これから人種のるつぼといわれるアメリカで学ぶとき、いじめられないか、仲間外れにされまいか、と父のほう心配しているときに、この言葉は決定的な励ましとなって耳をうった。

「そうだ、大丈夫だよ」と父はむすめたちにいっただ。

その夜、モールの木の間隠れに、ちいさなランタンが瞬くのが見えた。行ってみると、できたばかりの5万1千のベトナム戦死米兵の名前を刻んだ黒い長い記念碑で、迷彩服の兵士がテントで不寝番をしていた。アメリカの悲劇を2度も見る気がした。

それからわずか2カ月後、ハロウィーンにまたワシントンにでかけたとき、宵闇迫るリンカーン記念堂で、父親が、突如かわい子どもから“trick or treat?”と手を出され、すわ追剥か、“Pardon?”と真顔でききかえず父親に、娘たちは、あきれ顔でくすくす笑い「飴、飴」と手を引いた。こどもたちの人種のるつぼに溶け込むことのなんと早きことか。

母校

吉田 哲

1977 Harvard U.

元・共同通信社記者

「これから教室で話すエネルギーの問題は、わずか1%の話だ。残る99%のエネルギーは、日々地球上から無駄に消えている」—2度にわたる石油危機の後遺症が世界全体に漂う1977年秋、ハーバード大学のダニエル・ヤーギン教授の「エネルギー講座」は活気に満ちていた。最近、NHK教育テレビのマイケル・サンデル教授の「白熱教室」が話題を呼んでいるが、それと同じような熱気があった。

セミナーのジョン・オデル教授の「国際経済学」は20人程度の少数で、とにかく議論は延々と続いた。論文は東南アジア諸国連合(ASEAN)のアジア地域共同体的話を書いたが、雪の積もった日に教授室に呼ばれ、半日みっちり論文について質問され、議論した。結果は「Aマイナス」。ゼミで発言がもっと欲しかったのがマイナスの理由だが、「情報を最も良く理解している」と評価された。

ハーバードではジャーナリストのプログラム「ニーマンフェロー Nieman Fellow」として1年間過ごした。米国のフェローは12人、外国からはポーランド、南アフリカ共和国、インド、そして日本の4人。ニーマンでは、ハーバードの教授たちや研究者は無論、キッシンジャー前国務長官や故エドワード・ケネディ上院議員から作家のジョン・アップダイク氏など多彩な人を招いて昼食会やセミナーを開いた。

以来30年余り、ハーバード大学からは手紙やメールなどが自宅や会社に来る。ご承知の卒業生も多からうが、Harvard MonthlyやHarvard Travelは大学のニュース、人事、旅行案内で中身が充実してい



る。学長の話から教授や助教授の募集。ホームページに飛ぶと、学術業績を事細かく紹介したり、就職情報では学生寮の料理人の募集までである。

Harvard Travelではシルクロードの旅、アマゾン紀行、ヒマラヤ登山など世界の秘境にそれぞれハーバードの専門教授や講師が随行して説明を受けながら旅する企画だ。

ひるがえって日本の大学はどうだろう。他の大学は分からないが、わが母校慶応義塾大学について言えば、卒業以来、大学のニュースや教授陣の動きなどの便りはまったくない。大学の名誉のために書き加えるが、私は卒業後転勤が多く、住所も転々としたから把握できないのかもしれない。あるいはホームページを開いて登録すればいいのかもしれない。ただ、ハーバード大学では、積極的な発信をしているようだ。学校は無論、友達や会社、故郷や国家も、情報が多くてやりとりがあれば、自然に愛情や愛社精神、愛国心も増すが、疎遠になれば愛着も薄れる。

昨年秋、ニーマン同窓会がハーバードで開催された。私も含め多くの同窓生はすでにリタイア。あるいは亡くなってちょっと寂しい会だった。もっと寂しい話。シカゴ・トリビューン紙の論説委員が給料の安さを嘆いていたが、その数ヶ月後の昨年末、経営難からトリビューン紙は休刊になった。彼女は失業。娘にはこの仕事(ジャーナリスト)はさせたくないと話していた。

学びあう日々

竹内 葵

1981 Cornell U./Columbia U.

聖心女子大学・東京大学 講師

雑誌記者時代には、予想もしなかった大学での教職を得て、15年。きっかけは、フルブライト・スカラシップであるの言うまでもない。主に教える内容が、同じ事柄のニュースやドキュメンタリーであっても国によって取り上げ方が違うといったことを学びながら、各自、改めて日本のメディアや社会について考えてみようという授業のため、学期中は、毎日セカセカと海外ニュースの録画や編集、新聞や雑誌のコピーに追われている。加えてカリキュラムの都合で、英語のプレゼンテーションやディスカッションもあるので、クラスの雰囲気盛り上げる応援団長も務めなくてはならない。いくつかクラスのエピソードをご紹介します

よう。

ある日の授業 (1) 今春NHK教育テレビで放送され話題になった政治哲学者マイケル・サンデル教授の『(ハーバード) 白熱教室@安田講堂』を観せて、感想を書いてもらう。「正義」とは何か？公正であるとはどういうことか？道徳的に何が正しいのか？学生たちに議論を挑発する教授のスタイルは、極めてアメリカ的である。例えば学生が身近に考えられる所得格差の問題「イチローの年俸15億円は、オバマ大統領の3500万円と比べた場合、高すぎるか？」について、東大生は、たとえオバマ大統領の42倍の年俸であろうとも、イチローのこれまでの努力や数々の偉大な記録に対して妥当だという意見が、25人×3クラスすべて圧倒的多数で議論にならず残念だった。実力主義の反映だろうか。一方、お嬢様学校として知られる女子大では、「『白熱教室』は、大変面白かったが、これは、あくまでもエリート同士の議論であり、普通の人々にとって選択肢は二つしかない、善は善、悪は悪なのである…親の庇護を受ける身で偉そうなことを言うものだというのが私の率直な感想である」といった辛口評もあり、教室中に笑いと拍手が巻き起こった。ちなみにこの学生は、大手新聞社の記者内定を貰っているエリート予備軍？なのだが、私は、彼女の反骨精神に期待している。

ある日の授業 (2) BBCのミャンマー総選挙の



ニュースを観て、学生に聞いてみる。「Myanmarではなく、Burmaと呼んでいるのは何故？」学生沈黙して「？」。私「英国外務省は、ミャンマーの軍事政権を認めていないからです。アメリカ国務省のサイトでもBurmaになっています」と言った瞬間、「おお～なるほど！」と学生たちの目が輝く。そんな時は、このクラスをきっかけに今後は海外ニュースも観てほしいと願い、準備の苦勞も吹き飛ばしてしまうのである。

一般的に「キーワード的な知識はあっても理解がない」学生が増えているといわれて久しい。昨年、キング牧師の演説「I Have a Dream」を聞いたことがある東大生が40人×3クラス中、どこも1割程度だった時は、「これは、いかん。次世代に伝えねば！」と使命感を新たに。学生との会話で、日頃ご縁のないアニメやらAKB48について詳しくなる私だが、今日も彼らの知的好奇心を刺激すべく教材作りに励んでいる。

一度に3人程度かと思えます。

東京からの交通：JR中央線の場合；新宿から特急で2時間（小淵沢駅下車）、料金；乗車券（往復）5880円、特急券（往復）2610円、ハイウェイバスの場合；新宿から2時間15分（長坂高根下車）、乗車券（往復）4300円

気候条件等：標高は1000mでかなり高いので夏は涼しく冬は寒いところです。この数年は夏も暑くなりましたが、それでもエアコンをしません。冬は零下10度になりますが、幸い雪は少なくひと冬で数回程度しか積雪はありません。人工雪のスキー場は近くにありますが、寒いのでかなり良好なスキー場です。

私は趣味でバイオリン制作とその音響学的研究をしており、大体午前中はバイオリン制作、午後は畑仕事などをしております。その他には1年に4-5回程度ですが、社会人（医療技術者および医者）を対象とした講演（レーザーに関する安全問題）を10数年続けております。

第2回 三上フォーラムに参加して

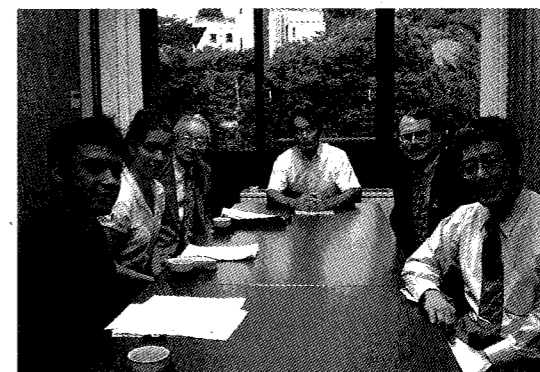
故三上泰永氏（第一回1952年フルブライト留学生・テキサス大、都留文科大学名誉教授）がフルブライト記念財団に寄付された1億3700万円が、米国からの毎年2名の冠奨学金の原資に使われるようになってもう5年が過ぎようとしている。教え子で且つ後輩同僚にもあたる同大学の西出教授のお骨折りで、昨年につづき「第2回三上フォーラム」が7月9日（金）午後4時半から2時間余にわたって行われた。昨年と比して参加者も激増し（正確には25倍）、学生の真剣な態度はこの催しが軌道に乗ってきたことを物語るものであった。

最初のスピーカーはアンドリュー・アボドナドさん（北大）「アイヌ民族の人権」、二人目はキアラ・テルスオロさん（神戸大）「日本の伝統音楽、特に琴について」であった。

もともと、アイヌ民族は北海道、南樺太、千島列島の先住民族であった。明治維新後、日本政府はアイヌを集団としてではなく個人として日本国憲法で対応する方針を貫き通してきている。アイヌの人達も、差別の不利をきらって、諸事を曖昧にするようになり、1994年の調査ではアイヌ人口は2万4千人まで減っている。

アボドナド氏によれば、「二風谷（ニブタニ）ダム」での訴訟に即発された不当行為に対して、また最近、国連が世界の少数民族の不利な扱いを是正すべしという大きな流れにそって、アイヌに対する従来の日本政府の方針に異を唱える声が増えるようになってきた。

アボドナド氏は、1986年に当時の中曽根総理大臣が「日本は単一民族国家だから教育が行き届いている」と宣したことから説き起こし、アイヌに対する日本語教育の強要でまず言葉を死滅させ、固有宗教、文化を細らせ、戦後憲法で個人としての権利を表に出し、それを守ることに徹して、集団・民族の色合いを排除してきたと強調した。これに対抗するには、国連をたてて、他の国の例も参照しながら、憲法にまで踏み込んでいくしかないというのが彼の主張であった。しかし、彼が参考にする在日コリアン等と比べると絶対人口数が少な過ぎるのが迫力を欠く。彼はこの研究から、将来、国連で弁護士としてこのジャンルで頑張りたいとの将来像を描いていて、このアイヌ研究がきっかけとなって大成していくかも



しれない。活躍を期待したい。

つぎに演台に立ったキアラ・テルスオロさん。音楽は先ず好きであることが最初にくる。外交官の両親と共に様々な国に暮らし、音楽も幼少のころからバイオリン、ついでフルート、そして最後は自分の声、つまり声楽家の領域で、ある水準までいっているのが、彼女の音楽歴である。それが、ひょんな機会から「琴」と出会い、ほれ込み練習し、他の民族楽器に比べてまだポピュラーな琴について、その現在、未来を研究したいと、本家の日本にやってきた。

彼女は説く：本来、日本では「洋楽」と「邦楽」は相容れない両極を構成してきた。明治以来、学校教育は洋楽、邦楽は学校課外の時間に自分で研鑽に励むものとされてきた。そしてキアラさんは東京を避け、「琴」のメッカ大阪に着目した。家元制度の強固な「山田流」その他を包含する「生田流」は大阪で強い基盤を誇っている。又、洋楽と相性がよい「宮城道雄」は英語文献が多いこともあって、彼女は彼を経由して琴に対する造詣を深めた。

彼女によると東京芸大は400人に一人しか「邦楽」を大学の第2選択科目にしないのに比べて、大阪音大では、大学自体が高価な「琴」を多数購入、貸し出して、大学レベルの研修としては全国で抜き出していると、大学・学生の情熱の高さを評価している。民族音楽を大学といった高度教育機関のなかで、どう音楽教育の成果を出していくのか。彼女自身が「琴」に魅入られ、「好き」で習熟し、その熱意で米国でのフルブライト奨学生選抜の難関を乗り切って、日本滞在を有意義に過ごしている熱情がほとばしる素晴らしい講演となっていた。

(大野 熙)

ご提案 八ヶ岳山麓へどうぞ

石渡 裕政

1962 U. of Pennsylvania

鈴鹿医療科学大学・客員教授

私は退職後山梨県の八ヶ岳山麓にある清里に住んでおります。都会からは離れておりますので、ホストファミリーは地理的に無理だと思いますが、海外からのFulbrighterが週末または夏休みなどにちょっと泊りがけで（日帰りも可能です）出かけたという方のためにお世話することは出来ると思います。日本の山間部の自然を見たり経験したりすることに興味のある方をご案内し、いわゆるホームステイ的なお世話になるかと思えます。

部屋としては8畳の日本間と6畳の洋間（ダブルベッド付）を提供できますので、お世話できるのは